

**主 題：旧約に見る神の救いの計画 VI****聖書箇所：創世記 11章27節－12章5節**

過ぎた1週間は非常に騒々しい1週間だったと思います。日本の国を揺るがすかのような大きな議案が可決されるかどうかということで、多くの人たちが自分の意志を表明したことをテレビニュースで見ました。皆さんはいかがお過ごしでしたでしょうか？ 今日、創世記11章27節から12章5節までをともに学びたいと思います。

**序：** 聖書は旧約・新約を併せて1巻の書物です。旧約は新約を、新約は旧約を理解するために、それぞれ大切な位置を占めています。ローマ1：2, 3「:2 —この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、:3 御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、」、ローマ15：4「昔書かれたものは、すべて私たちに教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。」、ヨハネ14：6「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」、

**=これまで学んだこと**

何回かみことばを通して、神はご自分のかたちにアダムをお造りになったこと、そして、アダムの子どもたち、また、エノクやノア、その子どもたち、彼らの上に何が起こったのかを学んで来ました。

**1. 人類はアダムの子セツの子孫から最終的にノアと三人の息子たち（セム・ハム・ヤペテ）の子孫が残され、世界の各地に散らされていった。そこには民族の相違はあっても人種の違いはなかった。**

神はご自分が造った人間が正しく歩むことをしないで、罪の中に歩いていくその姿をご覧になって、一時は、全人類を滅ぼそうとされたのですが、ノアとその家族たちを恵みをもって救い出してくださいました、そのところを見ました。彼らはそのようにして特別に選ばれた人たちでしたが、すべてが神のみこころに適った歩みをしたわけではありませんでした。中でも、ハム族はその歩みにおいて大きな過ちを犯し、また、セムやヤペテの民族の人たちと相いれないような状況に置かれたことも聖書は教えています。神は、ノアと三人の子どもたちの関係を通して、セム族を祝福され、ヤペテをも祝福されました。そのところを見ました。ハムは父の恥ずかしい状態を見て喜び、そのことを兄弟たちに告げたというところから、残念ながら、神は「のろわれる者となる」と言われたのです。

**2. 神はそれぞれの時代において、その恵みのゆえに、ある人々を救われた。神が一方向的に彼らをお救いになった。**

ノアの時代から時が経って、創世記11章27節以降にテラの歴史が記されています。

**☆アブラハムを通して、神の救いの計画を見ていく****I. テラ 11：27－32**

11：27－28「:27 これはテラの歴史である。テラはアブラム、ナホル、ハランを生み、ハランはロトを生んだ。:28 ハランはその父テラの存命中、彼の生まれ故郷であるカルデヤ人のウルで死んだ。」、26節を見ると「テラは七十年生きて、アブラムとナホルとハランを生んだ。」と書かれています。70歳のときには、三人の子どもたちが与えられていたことを見ることができます。テラの家族構成と、彼らはいったいどこに住んでいたのかを見ていきたいと思ひます。

**1. セムの子孫 11：10, 24, 26**

1) エベルの子孫 16節

2) ペレグの子孫 18節

3) アブラムとサライと孫のロトを連れて、ウルを出てカナンへ向かい、カランに住み着いた

**2. その子どもたち 27－31節**

ナホル ⇒ テラ ⇒ アブラム、ナホル、ハラン

**1) アブラム**

アブラムが長男、ノアから数えて10代目と言われます。アダムから10代目がノアです。名前の意味は、アブは「父」、ラムは「高い、高貴な」で、「高貴な者の父」ということになります。このような名前を付けられたのです。妻は「サライ」です。意味は「王女」です。そして、残念ながら、彼らには子どもがいませんでした。サライは不妊の女だったからです（30節）。

2) ナホル： 彼には妻ミルカがいて、彼女はハランの娘でした（29節）。

3) ハラン： 生まれ故郷のウルで死にました（28節）。その息子はロトでした。

これが簡単なアブラムの家族構成です。彼らはセムの子孫でした。そして、31節に「テラは、その息子アブラムと、ハランの子で自分の孫のロトと、息子のアブラムの妻である嫁のサライとを伴い、彼らはカナン之地に行くために、カルデヤ人のウルからいっしょに出かけた。しかし、彼らはハランまで来て、そこに住みついた。」と記されています。このような状況にあったのです。

### 3. テラの死 32節

#### 1) 205歳の時にカランで死んだ(32節)

(族長時代の聖書の世界・地図を参照)、ウルは古バビロニア帝国の南西に位置し、北西に位置するのがカランです。ペルシャ湾に注ぐ大きな二つの川、チグリス川、ユーフラテス川、この真ん中にあるのがメソポタミアです。二つの川の間という意味です。ここにセム族のほとんどが住んでいたということを知ることが出来ます。北の方、黒海とカスピ海の間フルリ人があって、その真上にアララテ山と書かれています。ここからノアの家族たちが下りて来て、低地に住み着いたということを聖書は教えているのです。そして、セムの長男エラムはチグリス川の上の辺り、バビロニア帝国の南東エラムにこの種族は住み着きました。次男アシュルは古バビロニア帝国の真ん中辺りにあるアッシリヤに住み着きました。そして、古バビロニア帝国の北西にあるアラム、これはセムの五番目の子どもで彼の種族はこの辺りに住み着きました。三番目の子どもアルバクシャデ、その孫にあたるエベル、このエベルがヘブルということばの発祥で、ヘブル民族の先祖であると言われます。彼らはウルに住み着いたのです。

このようにセムの子どもたちのほとんどはチグリス川とユーフラテス川の近辺に住んでいたことが分かります。エベルの子孫はウルに住み着きました。テラとアブラムの家族はウルに住んでいたのです。けれども、神は彼らに「ウル之地から出て行きなさい」と言われたのです。テラはアブラムとサライと孫のロトを連れて、ウルを出てカナンに向かいます。そして、カランに住み着きました。11:31にそのように記されています。ウルはシュメール文化の中心地で、偶像礼拝、姦淫の罪に溢れた町でした。

もう一度、31-32節をご覧ください。「:31 テラは、その息子アブラムと、ハランの子で自分の孫のロトと、息子のアブラムの妻である嫁のサライとを伴い、彼らはカナン之地に行くために、カルデヤ人のウルからいっしょに出かけた。しかし、彼らはカランまで来て、そこに住みついた。:32 テラ的一生は二百五年であった。テラはカランで死んだ。」、テラ的一生はウルとカランで過ごしました。ところがこの二つの町はともに名高い偶像崇拜の町です。ヨシュア記にそのことが記されています。ヨシュア記24:2「ヨシュアはすべての民に言った。「イスラエルの神、【主】はこう仰せられる。『あなたがたの先祖たち、アブラハムの父で、ナホルの父でもあるテラは、昔、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えていた。』」、同じ、ヨシュア記24:14、15には「:14 今、あなたがたは【主】を恐れ、誠実と真実をもって主に仕えなさい。あなたがたの先祖たちが川の向こう、およびエジプトで仕えた神々を除き去り、【主】に仕えなさい。:15 もしも【主】に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のエモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、【主】に仕える。」と記されています。

「川向うに住んでおり」とありますが、チグリス、ユーフラテス川の間、ウルに住んでいた、その辺りには多くの神々が存在しました。また、人々が増え広がり、文明が発達します。

\*川向う = メソポタミア(シヌアル)から二つの川の間

北部はアッシリア、南部はシュメール、現在のイラクです。

・メソポタミア文明 : BC3500-3000年、最も古い文明

・シュメール文明 : BC2800-2900年、

その神々は、「天神」「創造の神」「太陽神」「月神」「大気の神」「大地と水の神」など、数百の神々であったと言われます。

この地で最古の神話としてギルガメシュ叙事詩が生まれました。そこに記されているギルガメシュ王は2/3が神、1/3が人という半神半人の男だと言われています。

・アッカド時代 : BC2360-2160年、アッカドは後にバビロニア、アッシリアと、二つの国に分かれていきます。

・ウル王朝 : BC2070-1950年、この時代に人々が崇めたのは太陽神シャマシュ、月神シン、女神ニンガル(これは月神シンの妻で通称ニーナと呼ばれ、ニネベの町の起りと言われる)

#### 2) 異教の神々

そして、アブラムがこの地を出よと言われたのはいつごろか?アブラムが生まれたのはBC2000年頃と言われますから、ちょうど、ウル王朝のとき、多くの神々が人々によって崇められていた時代でした。人間は唯一の神によって創造されましたから、その神を崇めなければならなかったのです。しかし、彼らは大きな過ちを犯し続けました。唯一の神を捨てて多くの神々を拝むようになったのです。新

約聖書ローマ人への手紙 1 : 19 - 25にはそれらの特徴が記されています。1 : 22、23、25「:22 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、:23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。…:25 それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。」、神のご栄光を人間、鳥や獣、あまつさえ、はうもの、そのようなかたちに変えてそれを拝んだと言います。それは昔のことで今はそうではないというものではありませんが、そのような時代があって、アブラムとその家族はまさにその偶像崇拜の最中に置かれていたことを見ることができます。

#### \* 神がことばを混乱させられた結果、

人は全世界へと散らされただけでなく、多くの国家、偶像崇拜を生み出しました。神から離れた結果は、人が自分の形に似せて多くの神々を作り出していったことです。

・ **バビロニアの主神** : マルドークです。ニムロデがバベルの町を造り、そこに頂が天に届く塔を建てようとした。彼は自分が神になりたかった、神として崇められたかったのです。彼の死後、人々はこのニムロデをマルドークとして崇めるようになります。バビロニアの守り神として約1000年間、人々に崇拜されたと言われます。

・ **アッシリアの主神** : アッシュールと言います。

このマルドークとアッシュールの二つの神の名はセム語です。ですから、セム族がこれらの神々を作り出していったことを私たちは見ます。非常に残念なことです。自然のものを神格化する、また、人間を神格化する、こういうことが行われて来たのです。偶像崇拜、多神教、また、汎神論というのがあります。これはすべての物体に、空気、火、太陽、月、人間、机でも椅子でも、すべてに神が宿るといえるものです。至る所に神がおられる、だから、人間が神であっても不思議ではないという、そういう考え方です。私たちは唯一の神を信じていますから、唯一神論です。

3) ちなみに、 : 日本の宗教 2010年、文部科学省の宗教調査によると、

神道=1億700万(氏子) 仏教=8900万(檀家) キリスト教=300万

その他=1000万 合計=2億900万 \*実際は、7200万が無宗教

神道は日本人はすべて自分たちの氏子と言います。仏教は、江戸時代に檀家制度ができて多くの人たちは檀家に属しています。信仰があるかどうかは別にしてシステムとして自分たちの宗教の中に数えているわけです。だから、日本人が「あなたの宗教は何ですか?」と問われたときは、信じているかいないかは別にして、「私は仏教です」「私は神道です」と答えます。家に神棚があったり、仏壇があるからと、それをもとにして答えるので、この調査ではこのような数字が出て来るのです。

世界的には、キリスト教は22億(32%) イスラム教16億(23%) ヒンズー教15% 仏教7% 無宗教11億(内、60%は中国人)です。

\* **仏教伝来はAD538年**(日本書紀では552年)と言われています。従来からあった日本神道と仏教とがぶつかり合うことが起こるようになったのです。平安時代(794年~)には、仏が神の姿となってやって来たという説(本地垂迹説)が生まれました。日本にあるいろいろな神は仏の仮の姿であると言うのです。例えば、徳川家康、豊臣秀吉、この二人の英雄は、生きている間に自分は神として崇められたいという願いをもっていました。だから、自分が亡くなったら神社を建てて必ずそのようにしてほしいと願っていました。徳川家康は死後、東照大権現と呼ばれます(神君家康)、仏が上であるとし、豊臣秀吉は豊国大明神で神が上であるとし、日光東照宮と豊国神社です。このように人間が神として、あるいは、仏として奉られるような時代が過去にあったのです。

後に、明治時代になると、本地垂迹説は間違っている、仏教よりも神道が上であるという考え方が出て来て、神仏分離が唱えられ、神道が国教と定められました。この時、人を神とする多くの神社が設立されました。特に、天皇陛下を奉ることが行われました。天皇は神の子孫であるという考えです。例えば、平安神宮(桓武天皇)、橿原神宮(神武天皇)、明治神宮(明治天皇)、北野天満宮(菅原道真)、大石神社(大石内蔵介)、湊川神社(楠木正成)、東郷神社(東郷平八郎)、大鳥大社(日本武尊) 柿本人麻呂神社が日本に四つか五つあります。柿本人麻呂が奉られて二つのご利益があると言われます。それは火事の神(ひとまる⇒火が止まる)、安産の神(ひとまる=人生まる)、このように名前からご利益を生み出して人を神として拝むのです。これを聞いて、そんなことがあるのか?と思いますが、このように神を作り出していくのが今までのあり方でした。

#### \* 参考 : 大日本帝国憲法=

・大日本帝国は万世一系の天皇之を統治する(第1条)

・天皇は神聖にして侵すべからず(第3条)

これを基にして、日本は他の国々よりも優秀であるという考えが生まれて来ました。天皇は神であるから他の国々のリーダーたちよりも上である。日本国民は神の国の民族なのだから、他の国民よりも上で

あるという考え方です。「八紘一字子孫」という古い考え方です。そして、最終的には、第二次世界大戦へと流れていくのです。このような考え方から出て来たのが、

・明治36年、第1期国定教科書「小学日本歴史」 ⇒ 天皇を神とする

「第1、天照大神：天照大神は我が天皇陛下のご先祖にて在す。その御徳極めて高く、恰も天上にありて世界を照らす如し。大神は御孫ニニギニミコトにこの国を授け給いて「皇位の盛んなること、天地とともに極まりなかるべし」と仰せ給いき、万世に動くことなき我が大日本帝国の基は、実に、ここに定まれるなり。この時大神は鏡と剣と玉との三つの御宝を尊に授け給いき、これを「三種の神器」という。その中にも御鏡は大神の御徳をあらわし奉るものにして、殊に尊し。されば、大神は「この鏡を見ると、なほ、我を見るが如くせよ」と仰せ給えり。伊勢の神宮はこの鏡を祭り奉れるなり。かくてニニギノミコトは三種の神器を頂きて、日向の国に降り給えり、ニニギノミコトより四代目の御方を神武天皇と申す。」、先ほど見た橿原神宮に奉られている神武天皇です。天皇の初代は神だということ子どもたちに教えるというものです。

このような流れがありました。もう戦後70年です。恐らく、多くの方たちはこのようなことを学んだことはないでしょう。明治時代には実際にこのような教えが為されていたのです。そして、第二次世界大戦が終わって、日本の国には新しい憲法が出来ます。その時に、天皇の「人間宣言」が行われました。1946年1月1日に天皇の詔書が発行されて、官報にそのことが記されました。その中に、天皇自らが「私は神ではない」と具体的に言われませんでした。記されている文章から、当時の新聞など、いろいろな方面から「これは天皇の人間宣言だ」ということが多くの人々に伝わったのです。当時の、昭和天皇は「神話に基づいての多くの概念があるが、その概念は違っている。」とその詔書で述べられたと言われます。だから、天皇が自ら神ではないと言われたことは一度もないということです。ただ、私たちはその「人間宣言」という詔書によって、天皇は神ではないということを知ったのです。

だから、現代においても、人間を神とする思想、しかも、それを国の宗教として取り入れられて来た歴史を見ると、今は関係がないと見ても、どんなことが起きるかもしれないということです。昨今の国会の様子を皆さんご覧になったことでしょうか。政治のことを話すのは良くないのですが、憲法があって、人々の人権が守られる、今まではそうでしたが、その憲法の考え方を一つの内閣が180度反対して考えを決めてしまうということが起こり得るということです。だから、これから後どのようなことが起きていくか分かりません。幸いに、私たちには信仰の自由が保証されて、今、唯一の神を信じて歩いていくことができるのですが、これから先、そのようなことが起きないようにと神に祈っていかねばならないと教えられるのです。

神道と仏教は別だという神仏廃棄論があり、神道を国教と定めたが、神道は国教ではないと定められており、私たちは今、神社は一つの宗教として私たちと同じ立場に置かれていることを見るができます。当時の、アブラムたちが置かれている立場はもっと酷い状況にあったかもしれません。彼らは自分たちで偶像崇拝をしていましたが、そのような環境の中から神はアブラムを召されたのです。

## Ⅱ. アブラハム 12:1-5

「:1 【主】はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」:4 アブラムは【主】がお告げになったとおりに出かけた。ロトも彼といっしょに出かけた。アブラムがハランを出たときは、七十五歳であった。:5 アブラムは妻のサライと、おいのロトと、彼らが得たすべての財産と、ハランで加えられた人々を伴い、カナン地に行こうとして出発した。こうして彼らはカナン地に入った。」、

### 1. 主の命令と祝福 1-3節

「わたしが示す地へ行きなさい。」、実は、これは2度目の召しでした。

1) 土地を離れ : あなたの生まれ故郷を出なさい、偶像に満ちたウルという町を出て、  
2) 親族を離れ : あなたの家族は偶像崇拝をしているから、そこから離れなさいと神は言われたのです。信仰はまず罪との分離から始まると言われます。分離することは信仰の一つです。罪から分離して唯一真の神の方に向くのです。

⇒そうすれば、

3) 大いなる国民とする : アブラムとサライには子どもがいませんでした。75歳の夫と不妊の妻に子孫が増やされ、尚且つ、土地が与えられるという約束です。

4) 祝福する : そして、「あなたを祝福し、」と言われました。

5) 名を大いなるものとする : 後にアブラハムとなりますが、この名によって世界中の人々が大きな祝福を得ることができるのです。

## 6) 地上のすべての民族はアブラハムによって祝福される

### 2. 命令の実行 4-5節

彼はその命令を実行しました。

- ・主が告げられたとおりに出かけた
- ・75歳のとき、カランを出た
- ・カナンの地に入った

しかし、アブラハムは失敗しました。

### Ⅲ. アブラハムの失敗 12:4-5

#### 1. 彼が従ったのは、2度目の命令であった

##### 1) わたしが示す地に行きなさい

最初の命令は、メソポタミヤ(カルデヤ人の地、ウル)で為されました。

**\*神はアダムから2000年の時を経て、アブラハムに現われたのです。**

なぜ、これが2度目の命令であったのか?使徒の働き7:2-4をご覧ください。「:2 そこでステパノは言った。「兄弟たち、父たちよ。聞いてください。私たちの父アブラハムが、カランに住む以前まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現れて、:3 『あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け』と言われました。:4 そこで、アブラハムはカルデヤ人の地を出て、カランに住みました。そして、父の死後、神は彼をそこから今あなたがたの住んでいるこの地にお移しになりましたが、」、このようにルカが記しています。「カランに住む以前まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現れて、」と書かれています。今見ている創世記12章では「カラン」にいたときです。ですから、ウルにいたときにそのような神の召しがあったということが教えられています。旧約聖書だけでは分かりませんが、新約聖書を見るとそのような出来事があったようです。

##### 2. アブラハムの失敗

神の働きに用いられるために神はアブラハムを召されたのですが、それにも拘わらず、

・父とその家族とともに出かけた : 聖書を見ると、あたかも父のテラが家族を連れて出て行ったかのように、そのときに、アブラハムは父や家族と離れるべきでした。けれども、いっしょに出かけていきます。

・甥のロトを連れて行った

・その結果、カナンに召されたが、カランに住んだ : いわゆる、足止めに遭ったのです。折角、ウルから出たのに、父や兄弟、その家族たちとともにカランに住んで、偶像が支配するその土地で75歳まで過ごしたのです。

☆新約聖書では、次のように記されています

### Ⅳ. 新約聖書の解き明かし

#### 1. 神のご計画

ヘブル書11:8に「信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかわからないで、出て行きました。」と書かれています。アブラハムにはやがて示されるカナンという約束の地、相続財産があったのです。

**\*相続財産として受け取るべき地 :** 私たちの相続財産は何でしょうか?私たちが受け取るべき地は「天の御国」です。私たちに天に国籍があります。ピリピ3:20に「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」と書かれています。私たちが行くところはそうに備えられているということです。これは神から相続財産として与えられ、私たちの側には何の理由もありません。アブラハムが召されたのは彼の信仰がすばらしかったからではありませんでした。家族そろって、彼も偶像礼拝をしていたのです。でも、なぜか神はアブラハムを召されました。

私たちもそうです。偶像礼拝をしていました。私の小さい頃高石に住んでいましたから、高石神社があって、そこで祭りになるとだんじりを引き神輿が出ていろいろな屋台も出るので楽しみでした。祭りになるとお小遣いをもらって、神社に行って買い物をしたりくじを引いたりしました。そういうところに住んでいたのですが、今、救われてこうして神に用いられるような場所に置かれているということです。私が何か努力したのでしょうか?いいえ。何かいいことをしたから?いいえ。頭がいいから?お金持ちの家に生まれたから?どれもNOです。何も価値がなかったのに今このように救われて神を信じる者として天に国籍をおいていただくことができるのです。まさに、「救いとは神の恵みである」と教えられます。

#### 2. 信仰の基本

・行くところを知らないで出て行く : これからどんなことが起こるのか分からないが、すべてを神

にゆだねて信仰の道を前に進んでいくのです。後戻りはありません。Ⅱコリント5：7に「確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。」とあります。先ほど賛美した聖歌539「見ゆるところに依らずして、信仰によりて歩むべし、何をも見ずまた聞かずとも、神のみ約束に立ち、…」、アブラハムの信仰はまさにそうでした。ヘブル11：1、2「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。：2 昔の人々はこの信仰によって称賛されました。」、神が信仰を称賛されるのは、目に見えないけれど神にすべてをゆだねて歩いていくことです。信仰と希望は違います。希望はそうなるかどうか分からないけれど、信仰は必ずそうなるという確証があります。神の約束によって保証されているということです。私たちに天の御国に国籍があるというのは神の保証です。そのためには、

・罪からの分離～：出て行かなければいけません

(1) 神が行うように言われたことを行わないこと

(2) 神が行わないように言われたことを行なうこと これらは罪です。

・疑わないで行動する

これが「信仰」です。アブラハムは「そこから出て行きなさい。そうすれば…」と神から言われました。

### 3. まだ、信じておられないあなたに…

神は「そうすれば、」と言われます。使徒の働き16：31「ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。」、間違わないでいただきたいのは、家族が信じているからあなたも救われているということではないということです。また、あなたが救われているから家族も救われるということでもありません。あなたも家族も一人ひとりが個人的にイエス・キリストを自分の救い主として信じなければ救いはありません。それが聖書が教える「信仰」です。今、このような状況に置かれて迷っておられる方がおられるなら、アブラハムのように、その行く先を知らないでも神の約束があるから、信仰の道に足を踏み入れていただきたいと思います。イエス・キリストをあなたの救い主として信じていただきたいと思います。

すでに、信仰をお持ちの皆さんには、言うまでもありませんが、私たちには前しかありません。後ろを振り返ることはないのです。どんなことがあっても、神の約束を、神の保証を信じて歩いていきたいという思いを常に持ち続けていただきたいと思います。

終わりに：

私たちはアブラハム同様、この日本で偶像礼拝の環境下に育ちました。しかしながら、神はアブラハム同様、私たちをあわれんでくださり、その恵みによって私たちを救ってくださいました。私たちが正しかったから、私たちの信仰が他の人々より優れたものであったから…ではありません。自分たちが救われたことを考えると、まだ救われていない家族や友人たち、周りにいる多くの人々を神が救われるようにと望んでおられることを教えられます。この世界で起こっている様々な出来事を見ると、確かに、終わりの日は近いことが分かります。患難時代が迫っていることを感じます。まだ、救われていない人々のために祈りましょう。機会を用いてみことばを伝えましょう。